

歴史学講義

(遙かなるイスラームを尋ねて)

我々はこれから一年間に涉つてアラビヤの歴史をひもとき、中でも、アラビヤ人が残した最大の遺産の一つであるイスラームに焦点を当てて尋ね歩いてみよう。

だが我々がこれから尋ねようとするのは或る一つの宗教ではない。イスラム教という宗教ではない。或る出来上った教義体系を備えた宗教ではない。

宗教と聞くと大多数の日本人はすぐに特殊な反応をする。ヨーロッパやアラビヤを理解するには彼等の宗教の理解が不可欠のだが、……。だがこの際、なんだか矛盾する事を言うようだが、宗教とか何とかはどうでもよい、と言っておこう。我々が尋ねようとしているのは一つの宗教ではなく、一般的にアラビヤ人の基本的なものの見方・捉え方はどのようなものであり、そしてそれがどのように具体的な歴史に結実していったかという事である。その事とイスラームに何の関係があるのだと疑問に思うであろう。実は、イスラームこそがそのアラビヤ人の基本的なものの見方が最も端的に反映されているものなのである。イスラームの核心はコーランであり、コーランはアラブ的精神の結晶である。

アラビヤ史一般の最も基礎的な参考文献を以下に掲げてみよう。

- ① P.Hitti : History Of The Arabs MACMILLAN-London; '37
- ② A.Sanhoury : Le Califat ORIENTALISTE-Paris; '26
- ③ C.Brockelmann : Geschichte Der Islamischen Voelker
Und Staaten OLDENBOURG-Berlin; '39
- ④ B.Lewis : The Arabs In History HUTCHINSON-London; '50
- ⑤ R.Nicholson : A Literary History Of The Arabs
UNIV.PRESS-Cambridge; '66

(上記のは入門的な総論風の文献でありコーランやイスラームそのものについての情報には乏しい。必要に応じて紹介を重ねる。)

I イスラーム、コーラン、アラブ等々の言葉自体について

① イスラーム

イスラームのいわゆる宗教的側面を特に強調する表現を採ればイスラーム＝イスラム教となろう。イスラム教は一体どんな宗教であるか。我々日本人の間で一般に漠然と知られているのは、アッラー神を唯一絶対の神とする厳格な一神教で、一日に五回の礼拝をメッカの方向に向かつて行ない、アルコール飲料と豚肉を禁じるが、妻は四人まで持っても良い、というような教えの主として中近東あたりの宗教であろう。これはこれとして間違っただ知識ではない。間違っただいはないがこの程度のことならばむしろ全く知らない方が有益である。イスラム教はどんな宗教なのかと質問して上記の様に答えられた時、諸君は、ではひとつ信者になってみようかと思うだろうか。私ならば断じて厭である。そこには、四種類の妻が持てるという点はともかくとして、心ときめくような雰囲気悲しいぐらいに無いではないか。三行半にまとめた知識ではそれも仕方が無いではないかと諸君は弁護してやるだろうか。私ならば絶対に弁護してやらない。たとえ三行半だろうとそんな表現は全人類の五分の一が信者だという事実の重さに対して鈍感極まる。しかし今はともあれ、それはそれとして先に進まなければならない。

同じ一神教でもイスラム教がキリスト教と異なる重要な点は、前者が聖・俗の区別をしないという事である。イスラム教では、

a. 聖職者は制度として無い。つまり、いわゆる牧師・司祭・坊主・神主に相当する職業は無い。いわんや聖者・聖人などは在り得ない。キリスト教のイエスに相当するムハンマド（マホメット）自身にしてからが全くの唯の人である。要は、これこれの人間は清らかでしかじかの人間は俗塵に染まっているという考え方をしないのである。聖・俗という言葉はどうしても使いたければ、人間は誰でも皆、聖であると同時に俗なのである。

b. 聖なる場所（空間）と俗なる場所（空間）の区別が無い。教会や寺院等は無い。「日本語ではイスラム寺院とも呼ばれているモスクが在るではないか、この日本にも東京や神戸に在る筈だ」

と反論するかも知れないが、イスラム寺院という呼称が可笑しいのであって、モスクの実体は、そこにたんにメッカの方向を示す印が刻まれているから便利な礼拝の場所に過ぎない。それが天井や壁の有る建物になっているのは砂嵐などを防げるからであって、そこに何か祭つてあるのではない。この建物はイスラム圏ではマスジドと呼ばれている。礼拝の場所を意味する。モスクという日本語は英語の mosque をそのまま使っており、そして mosque は上のマスジド (masjid) が訛つたものである。空間に聖・俗の区別を付けないから、例えば自分の家は俗塵溢れるが教会は聖域であるなどという発想が無い。自分の家そのままが言わば教会そのものなのである。

c. 聖なる時間と俗なる時間の区別が無い。月曜から土曜まで会社で俗事に従事するが、日曜には身を清めて教会に行きミサに預かるなどというような事は無い。一日24時間一週7日ことごとく聖にしてかつ同時に俗な時間なのである。

八百屋さんが自分の家で野菜を売ったり掃除をしたりする事と、牧師さんが教会で聖書を読んだり賛美歌を歌ったりする事とは同じ次元の事なのである。

このような訳でイスラム社会の全ての相に涉つて聖なる事柄と俗なる事柄の区別が無いので、いわゆる宗教的なこととそうでないこととの区別がされない。換言すれば、イスラム教は単なる宗教上の規範ではなく宗教の枠を超えて生きることの全てを律する規範である。だからイスラム教という言葉から宗教を意味する教という字を取去つてイスラム (より原音に近くイスラーム) と呼ぶのが実情に合っている。

イスラーム (Islam) という言葉は元来アラビヤ語でゆだねることを意味している (ゆだねるという動詞 aslama の動名詞形)。自分の価値判断・意志決定など自分の心の動き全てを神という堅固な地盤・基準の上に置きゆだねるという含みで、この宗教の名前になり、又同時に、上述したように社会の全ての相に涉つての規範の総称となった。

4/26 (1)

② コーラン

キリスト教のバイブル（聖書）に相当する聖典がコーラン（Koran）である。アラビア語のクルアーン（Qur'an）の訛ったもの。朗唱されるものを意味する。この言葉は qara'a（朗唱する）から来ている。最近では日本語でもクルアーンと表記することが少なくない。

コーランの深い内容については後に論ずるが、ここでついでに導入としてその付帯的な諸点を紹介しておこう。

a. コーランは本来朗唱されるものであるからして、黙読でなく声に出して読まれるのが望ましい。イスラム圏では美しく朗唱出来る人は尊敬され、プロとなって高い社会的地位・収入が保証されている。一般の人達の間でも定期的に朗唱コンクールが開かれていてその美しさを競い合っている。

b. 全体は 114個の長短の章（スーラ）から成り、大体において長い章の順に配列されている。つまり物語的な展開の順に配列されてはいないのである。〔皮肉屋として一世を風靡した英国の劇作家 Bernard Shaw（1856～1950）はコーランを世界で一番退屈な書物であると言った。〕

c. 前項で物語的展開といったが、その内容の多くはバイブルと同じである。旧訳聖書の様にアダム、ノア、ソロモン、ヨブ等がしばしば登場してくるし、新約聖書の様にマリアやイエスが登場する。従ってバイブルにあるのと似たような表現も見出される。

d. バイブルとコーランはそれぞれの宗教の中での比重が著しく異なる。コーランはキリスト教でのイエスの位置に相当する。

e. バイブルは永遠のベスト・セラーであると言われるが、コーランの方がその呼称にふさわしい。確かに信徒数はキリスト教の方が多いが、どだい読まれる頻度が桁違いである。コーランはおそらく、かつて書かれた書物の中で最もよく読まれて来たものである。ちなみにコーランは新約聖書の5分の4の分量である。

f. コーランはアラビア語による殆ど最古・最初の書物であり、今日なおイスラームの総本山アズハル大学で全カリキュラムの基本コース（一般教育や自然科学のテキスト）となっている。

g. コーランは 77934 語、323621 字から成っている。

③ アラブ

アラビヤという地域名は最初にギリシャ人によって用いられた。即ち、今日のアラビヤ半島のみならずその北方のシリア砂漠及びその西方のシナイ半島を含む一帯をギリシャ人は arabiya と呼び、そこに住む人達を arabos (arapsとも綴る) と呼んだ。

(arabos の住む土地を arabiya と呼んだ)。これがローマ時代にも引継がれた(但しラテン語では、住民の方は Arabus ないし Arabs、地域名は Arabiya と綴った)。そして次の様にアラビヤを三区区分した。1. Arabiya Petraea (岩のアラビヤ) : シナイ半島とその以東の一部 2. Arabiya Deserta (砂漠のアラビヤ) : シリア砂漠 3. Arabiya Felix (幸福のアラビヤ) : 上記以南の全域、即ち今日のアラビヤ半島と大体同じ地域。[上記三区区分の名称中三番目の、幸福の、という表現は考え様によっては奇妙である。これは誤訳に基づくという説もある (cf. yumn = 幸福、yaman = 右方)]。

以降、中世・近代ヨーロッパ諸国にこの呼称で引継がれ、ヨーロッパを経由して日本にも伝わった。

日本ではアラビヤという地域名を主体とし、そこに住む人だからアラビヤの人つまりアラビヤ人と呼ばれ、こうしてアラビヤ語・アラビヤゴム・アラビヤコーヒー等というように専らアラビヤ、という造語が為されていた。しかし近年アラビヤの代りにアラブという言葉を使いアラブ人・アラブ語等々の造語も多く見受けられる。これは英語の Arab が尾を引いているのであろう。英語では Arab も Arabian (本来、アラビヤの、) も名詞や形容詞としてほぼ同意語になっている。

アラビヤ人は自分達のことを 'arab と呼ぶ。集合名詞である。'arabi がその形容詞形。アラビヤ語には、ヘロドトス以来の Arabiya に相当する言葉は無い。(場所→人間; 人間→場所)。Arabiya を表現するには、bilad al-'arab (アラブの土地) 或いは jazirat al-'arab (アラブの島=アラビヤ半島) 等を使う。

'arab という言葉が出てくる史上最古の記録は B.C.853年のアッシリヤ語の碑文においてである。曰く、「. . . アッシリヤ王 Shalmaneser 三世は、弱小国が互いに結託して攻撃して来た時

これらを撃退した。その内の一人は 'aribi の Jundibu という人物で、攻撃軍の為に千頭のラクダを用意していた。」。この最古の記録以来 'arab は 'aribi、'arabu、或いは 'urbi という表現で歴史上の諸記録の中に出てくる。(' r b)。

では、この ' r b の意味は何か。諸説に分かれる。1. 西を意味するセム系語根から来た (cf. gharb) 2. 支配する人々を意味するアッシリヤ語 'arabu から来た 3. 諸説の中で最も抵抗が少なく受け入れられているのは、ステップ地帯を意味するヘブライ語の 'arabah 乃至まとまってないもの (定住民としてのまとまりが無い) を意味する同じくヘブライ語の 'erebh から来たとする説である。砂漠やステップ地帯を徘徊する遊牧の民というのが語源の意味するところであろう。

A.D. 四世紀になるとアラビヤ人自身もこの 'arab という言葉を用いている。その時代のアラビヤ人の碑文に「. . 全 'arab の王. . 」なる人物の功績が記され、且彼の勢力圏がアラビヤ半島の中央部及び北部であったことが見てとれるのである。

アラビヤ半島の中央部や北部を徘徊して、ラクダを扱うのにたけた遊牧民が 'arab なのであった。そのような遊牧民だけが 'arab と呼ばれたのであって、従って、人種的にはこの民と同じでも、都市の定住民等は決して 'arab と呼ばれることはなかったのである。

もともとそのような意味で使われたこの 'arab という呼称は時代とともに変遷を重ねて、今日では、'arab とは、< アラビヤ語を母国語とし、過去のアラビヤ文化を自分への精神的遺産であると考えている人 >を意味し、このような人ならば誰でも 'arab であるとされる。 ['arab はさまよえる言葉である。]

④ サラセン (サラセン人、サラセン文化、サラセン帝国等)

サラセンとは最初はプトレマイオスの地理書に出てくるシナイ半島の一部族名 saracenoï が発端で、やがてアラビヤ人全体の呼称となり、更に遊牧民の総称となり、遂には全イスラム教徒を指すに至った。キリスト教徒側から敵意を抱いてイスラム教徒を指す言葉のイメージが少なからず付着している感が否めない。

II アラビヤ半島の地理的概観

今日イスラーム圏は東が太平洋、西は大西洋、南がアフリカの奥地、北が旧ソ連の奥地にまで拡がり、またイスラム教徒の構成はありとあらゆる人種に及んでいる。イスラームは世界的、国際的な生活原理なのである。

しかし過去、イスラームが成熟してゆく課程に於いて目覚ましく寄与したのは誰よりもアラビヤ人、イラン人、トルコ人であり、なかでも特に初期に於いてはアラビヤ人であった。予言者ムハンマドはアラビヤ人、聖典コーランはアラビヤ語であり、イスラームは先ずアラビヤ人の間に広まったのである。そこでイスラームの揺籃の地、アラビヤ半島に目を向けてみよう。

① アラビヤ半島 (jazirat al-'arab) の定義

東をペルシャ湾とオマン湾、西を紅海、南をアデン湾とアラビヤ海に囲まれ、北の境界を便宜上サウディ・アラビヤとヨルダン、イラクとの国境及びクエートとイラクとの国境とする半島。

a. 位置 東経 35~60度、北緯 12~32度。北西から南東に斜めに傾いている。

b. 面積 270万平方キロ (インド半島と並ぶ世界最大の半島)。しかしその三分の一は砂漠である。有名な砂漠は南東部にあるルブ・アル・ハーリー砂漠 (空虛な四分の一という意味で、60万平方キロに及ぶ；ちなみに日本の面積は37万平方キロ) や北部にあるナフード砂漠 (10万平方キロ)。他にも各地に砂漠とステップ地帯がある。元来アラビヤ半島はサハラ砂漠と地続きだった。

c. 形状 イタリアとは逆向きの短靴型をしている。南西端 (ヤマーン地方) を頂点としてメソポタミヤの方向に緩やかに下る高原となっている (平均海拔1000メートル)。紅海に添ってセラート山脈が走っているが、これは南に下るにしたがって高くなりヤマーン地方で最高で富士山ぐらいの高さの山になっている。

d. 気候 海岸地帯を除いて典型的な砂漠性ないし大陸性気候である。狭い海岸べりの低地は高温多湿で夏は猛暑。高原地帯は空気が乾燥していて、摂氏50度に達することがあるとはいえ、そう

暑くは感じない。冬、内陸部では摂氏零度以下になることもあり、雪も見られる。降水量はヤマーン地方を除いて極めて少ない（年間100ミリ前後）。ヤマーン地方では、4000メートル近い山もあり又季節風の影響を受けてかなりの降水量がある（年間1000ミリ）。この地方には川も流れていて農耕に適する肥沃な土地もある。

② アラビヤ半島の農産物

アラビヤ半島の海岸ペリを時計と逆方向の順にたどると、a.ヒジャーズ、b.アシール、c.ヤマーン、d.ハドラマウト、e.オマーン、f.ハサーの各地方となる。そこでの主要農産物を挙げると； a.では棗椰子（メソポタミヤから移植） b.ではアラビヤゴム c.は小麦とコーヒー（注.モカ） d.では乳香 e.では米 f.も米。これらの地方以外の内陸部各地に点在するオアシスでは、石榴、杏子、アーモンド、オレンジ、レモン、砂糖黍、西瓜、バナナ等が主要産物である。これらの中で世界的な名声を博しているものは、棗椰子、アラビヤゴム、コーヒー、オレンジである。

コーヒーはもともとアラビヤ半島対岸のエチオピアのカフア州の原産である（バンという木の实）。羊飼によつて発見されたという。古くから覚醒効果があることは知られていた。エチオピアからアラビヤ半島に輸入されたのは11世紀とも14世紀とも言われている。カフア州で採れるのでカフアと呼ばれた（コーヒーの語源）。アラビヤでは生豆を砕いて煎じて飲んだ（薬として）。14世紀頃コーヒーの樹そのものが移植され、同時に豆を炒つてからひきつぶして煮出す手法がとられ出した。アルコールが禁じられているせいか熱狂的に飲まれ出した。16世紀の半ばトルコに入り、末にヨーロッパに入った（コーヒーに関するヨーロッパでの最初の文献は1592年）。ヨーロッパに定着したのは17世紀の半ばである。シェイクスピア（1564～1616年）はコーヒーを飲んだことはあるまい。日本に上陸したのが1888年（明治21年）、上野に可否茶館という喫茶店が出来た。ヨーロッパには200年ぐらいの伝統がある喫茶店が在るが、エジプトのカイロのアズハル大学の側にあった喫茶店ではコーヒーが500年、他の飲物では1000年の伝統があった。

③ アラビヤ半島の畜産物

代表的な畜産物は羊、山羊、馬、ラクダである。

a. 羊、山羊 西南アジア一帯で古くから広く食糧用として畜産されてきた。聖書にもよく出てくる。旧約では、鳩と並んで、祭壇で神に捧げるはん祭（肉の焼ける香ばしい匂いを天の神に届ける）の主演である。キリスト教では、＜神の小羊＞と言えばイエス・キリストを意味する。支那で肉といえば普通豚肉を指すように、このあたりの最も親しまれる蛋白源が羊・山羊である。（日本では、関東と関西で、牛肉と豚肉の使用頻度が異なっている。）料理法は殆どロースト一本やりである。客をもてなすのに丸一頭屠るのは最大級の歓待とされる。この時、主客と主人とが目玉を（一つずつ）丸飲みする習わしになっている。エジプトの料理に、鳩の丸焼きをチキンの腹に詰めてチキンの丸焼きを作りそのチキンの丸焼きを羊の腹に詰めて羊の丸焼きを作りその羊の丸焼きをラクダの腹に詰めてラクダの丸焼きを作るという趣向がある。

私は山羊とラクダは食べたことがない。山羊はともかくとして、ラクダを食べたいとは思わない。ラクダは特に美味であるというものでもないらしい。鳩はとても美味しい。エジプトのカイロにはナイル川のほとりに日本の焼き鳥屋風の店があつて繁盛しており、少々高価ではあるがエジプトでは好まれる食品である。

b. 馬 アラビヤ馬、サラブレッドとして有名であるが（ナジュド地方）アラビヤが原産地ではない。カスピ海の東岸で家畜化され、ヒッタイト人によつて西アジアにもたらされ、シリアからイエス生誕の頃アラビヤにもたらされた。B.C.24年或るローマの將軍は皇帝宛ての手紙の中で、アラビヤ半島に馬はいない旨の記述をしている。馬は八世紀になつてアラビヤからスペインを通してヨーロッパにもたらされた。戦争時の機動力となる有力な家畜であつた。特にアラビヤでは馬は贅沢品であつた。馬を飼うには大量の水が要るからである。実に大量の水を飲むし、また飲まざなければならぬ。飲みが悪いと餌の関係ですぐに糞詰りになるのだ。これは馬にとって命取りである。ゴクンと飲むと一升の水が入るといふ。日本ではよく馬を川に連れていって水を飲ませる。

＜ 馬を洗はば馬のたましひ冴ゆるまで ＞ 塚本邦雄

欧米の画家もよく川で体を洗って貰っている馬を描いている。

サラブレッドは駆けているのが普通の状態であるような生き物である。フカヤカツオ等の高速回遊魚も高速で泳いでいるのが普通の状態であり、網に引っ掛かって動けないと死んでしまう。モグラは食べつつあるのが普通の状態であり、一日に自分の体重と同じぐらいの量のミミズ（50～60匹）を食べないと死んでしまう。

c.ラクダ <ラクダは砂漠の船である>。ラクダには背中に瘤が一つ有る（一瘤ラクダ）と二つ有る（二瘤ラクダ）とがいる。アラビヤ半島にいるのは一瘤ラクダである。（二瘤はゴビ砂漠等にいる）。私は二瘤ラクダは動物園で見たことがある（一瘤はアラビヤで見た）。両者の外見上の比較をすれば、一瘤は皮膚が言わばつるつるとした感じで毛深く無く灰色で瘤がしっかりと固定しているのに対し、二瘤は毛深くもじやもじやとしており茶褐色で概して薄汚く二つの瘤はぶよぶよとして揺れ動いている。一瘤は暑さに強く、二瘤は寒さに強い感じだ。さて、砂漠では（馬が贅沢品であるのに対し）ラクダは必需品である。ラクダ無くして人間は砂漠で生きてゆけない。砂漠を徘徊して遊牧しているアラビヤ人（アラビヤ半島の北部・中央部のいわゆる 'arab アラブ人）にとっては移動するということは本質的な重要性を持っている。その移動する力がラクダなのである。従ってアラブ人は自らを<ラクダの民>と呼ぶ。アラブ人とラクダは切っても切れない仲なのだ。彼等の社会ではラクダが価値の尺度になっている（ラクダ何頭分に相当するか）。アラビヤ語にはラクダを意味する同義語が1000単語以上もあると言われている。同義語が多いということは、そのものと社会との密着度が強く広範できめ細かいということである。ではいったいラクダはどのような生き物なのか。

ラクダの足：足の裏が大きく平べったく砂地を歩くのに適している。また砂漠は随分と危険で、ずぶずぶと体が砂の中に飲み込まれてしまうような場所もあるので、そのような場所を本能的に避けて通れるラクダは、人や荷物を載せて運んでくれて、まさに砂漠の船と言えよう。

ラクダの目：目のまっけが長くて、しかも二重にならうてなえ^てている。そのため独特の目つきをしており、かつ目の位置が人間

よりも高いせいもあるのだろうが、何だか人間を馬鹿にして見下しているようにアラビヤ人には感じられるのである。それで彼等は、ラクダが人間を馬鹿にしているのは、「人間がアッラーの美しい属性を99個しか知らないのに、ラクダは100番目を知っているからなのだ」としている。

ラクダの鼻：鼻の穴を自由に閉じることが出来る。人間などでは鼻の穴は普通の人では開きつ放しになっている。砂漠では砂嵐が頻繁に生じて、しばしば目や鼻の中に砂粒が入りこむのである。そこでラクダは長い二重のまつげで目を守り、随時に穴を閉じて鼻を守るのである。実に砂漠向きに出来ていると感心する。

ラクダの舌：舌が極めて頑丈。ラクダは木の葉や枝を食べるのだが、砂漠に生えている木の葉や枝は鋭い棘の付いているものが多い。それをいちいち気にしては駄目なので棘付のままむしゃむしゃ食べる。舌がすごく強くてラクダは痛くないのだ。

ラクダの瘤：瘤の中には水が入っていると思っている人が案外多いが、それは間違い。脂肪が入っているのだ。つまり栄養分を貯め込んでいるわけ。上で述べたようにラクダは木の葉や枝を食べるのだが、砂漠ではそれが常時あるとは限らないので食べれる時に食べ溜めをして脂肪として瘤の中に貯えるのだ。その時瘤が大きくなる。長時間食べなくても平気で、その時は瘤が小さくなる。ラクダは水無しで夏場で5日間、冬場で25日間もつ。

ラクダの胃：胃壁に小さな部屋が沢山あって、普段は筋肉で蓋をしていて、その部屋の中に水を貯えている。アラブ人は砂漠で水を無くして危機に陥った場合、棒をラクダの口に突っ込んでかき回し、ラクダは嫌がるが、やがてその胃の部屋に貯えていた水を吐き出し始めるので、それを受けて飲む。ラクダが二日ぐらい前に貯えたものは結構人間が飲めるといふ。

ラクダは彼等にとって移動する力や価値の尺度であるとか何とか言う前に、既にしてまるごと全てが彼等の生活の糧となっている。即ち、ラクダの皮はテントや衣服の材料、肉は食糧、乳は飲料（水は家畜の飲料にする）、糞は燃料、尿は医薬品やヘヤートニックになる。こうして見てくると、まことに彼等自身の言うように、彼等は〈ラクダの寄生動物〉なのである。

Ⅲ アラビヤ半島の人々

① 中央部・北部の遊牧民

これは主としてアラビヤ半島の中央部から北部にかけて遊牧をしている人々である（但し人種的にはオアシス＜メッカやメジナも元来はオアシスである＞や一部海岸地帯の定住民もこれと同族）。'arab（アラブ）という名前は最初彼等に付けられたものである。現在は普通ベドウィン族（或いは単にベドウィン）と呼ばれている。彼等はラクダ、羊、山羊などを連れて、牧草や水を求めて、砂漠やステップ地帯をさまよい歩いているのである。ベドウィンは自分達を＜ラクダの人々＞と呼び、その呼称を誇り喜んでいる。ラクダは彼等の生活に密着しており、既に述べたように、生活上の全ての価値の尺度になっている（ラクダ何頭分に相当するかというように）。このベドウィンの様々な面での根本的な特性・構造を探ってみよう。

a. ベドウィンはいわば超国家的存在である。

西南アジアのアラブ圏の国境は、その多くが、ヨーロッパ列強、中でもイギリス、フランス両国の力関係に基づいて定められたものである。そこに元から住んでいるアラブ人の事情におかまいなく、イギリス人・フランス人によって、まるで砂漠の上に定規で線でも引くみたいに決められたのであった。定住アラブ人は渋々その押し付け国境に従うが、ベドウィンはそのような国境などはまるで無視する。定住民ならば、従わないとき簡単に規制できるが、遊牧民では、規制しようにもとても出来たものじゃない。また、規制する側も、遊牧民に対しては、「ま、仕方ないか」という感じで無視しているようだ。ベドウィンにとっては、おそらく心理的な国境がただ一つあるだけだろう。即ち、「あの付近では人間は同じ位置でじーと動かない」といったような。アラブ圏では、心理的に、定住地域なんぞは副次的であって、砂漠こそが主要なのだ。だからベドウィンは定住民に対して優越感を持っている。いっぽう定住アラブ人（種族的にはベドウィンと同じ）は、ベドウィンに対してなにほどこ負い目を感じているようだ。メッカやメジナ等の定住アラブ人が都市国家とも言える規模の組織体

を形成していたのに対して（例えば耕作用の灌漑等は国家的規模の組織力を必要とした）、遊牧アラブ人（ベドウィン）は国家を形成しなかった。砂漠やステップ地帯では牧草や水が点在しており、それらの一点一点は、一どきには、限られた数の人・蓄しかまかなえない。人口が集中できない（むしろ、集中してはいけない）環境の他にも、牧草や水を求めてさすらい、その連れ歩いている畜産動物が増加するのをただひたすら待っているという生活のパターンは国家的規模の組織力を何ら必要としないのである。

b. ベドウィンはいわば超歴史的存在である。

彼等は上に述べたような生活のパターンを有史以来変えずに繰り返している。昨日の様に今日があり、明日はまた今日の様であるだろう。国家として組織されていないから、国家としての将来のヴィジョン、それと過去・現在との対比、諸外国との比較というような考察が為されて、個人の外からいやおうなしに変革を迫る国家的な圧力がないのである。近年、例えば日本製の車や時計、トランジスターなどがベドウィンの間に出回っているように、外形的には多くの変容はあるが、その基本的構造は全く変わっていない。

c. ベドウィンと定住民との比較

定住民と遊牧民との比較を通してベドウィンの特性を浮かび上がらせてみよう（遊牧民のうち最も典型的なのがベドウィンだと言える）。

定住民	遊牧民
勤勉・模倣・連帯 余分なものを持つ	怠惰・独創・独立 余分なものは持たない

定住農耕民には勤勉が不可欠と言えるであろう。日本のお百姓さんを観察すればこの事はすぐに分かる。同様に、模倣・連帯も農耕定住社会においては不可避免的に要求されることは容易に想像されよう。ところが、放浪遊牧民にとって勤勉である事は何の意味も持たない。早朝に、眠い目をこすりながら跳ね起きて、几帳面に羊のおなかをさすっても、為に羊の赤ちゃんが、それだけ余

分に早く生まれて来るわけではない。実体的に怠惰という性格が遊牧民に認められるのではなく、農耕民の持つあの異常な勤勉さが無いだけである。牧草地や水は無限に拡がっているわけではなく、放牧する家畜が一定の頭数を超えれば危険な事態を招くので、ベドウィンは比較的小さなグループを作って移動していて、連帯という観念も無縁である。連帯していれば共倒れになってしまうのである。こうして独立が必然的となる。あるグループが目指した方向へ、模倣してついても、あるのは食い尽くされた牧草地、飲み尽くされた井戸だけ。かくして模倣も無縁の観念となる。〈ミギニナラエ〉の模倣ではなく、自分は自分の道を行かねばならない。ことに当たっては自分で工夫をしなければならない。遊牧民に独創という実体的な性格が認められるのではなく、農耕民の持つあの異常な模倣性というものが無いだけである。

余分なものを持つ・持たないという表現は奇異であるが、次のような意味で使っている。放浪遊牧民は、家も、財産も、何もかも一切合切、いわば自分の身につけて一々持ち運ばねばならない。したがって必要不可欠なものばかりを自分の持ち物としている。定住農耕民はこれに対して、定住ということからして、不可欠なものではないようなものも持ち得るのである。物を幾ら沢山持っても別に困りはしない。また農耕ということからして、必要以上のもの（例えば、食べる他に、種まき用に使う穀物など）を持っていないと農耕は成り立たないのである。余分なものを持ってはやっていけない放浪遊牧民、余分なものがなければやっていけない定住農耕民という図式が成り立つであろう。

余分なものを持つ・持たないということに関して、上で見られた両者のコントラストは、同型のまま不思議なぐらいに拡張できるのである。即ち、

* 土地

放浪遊牧民のさすらう土地が、牧草と水という必要不可欠ぎりぎりのものを産する砂漠やステップ地帯の、いわゆる痩せた土地（余分なものを持たない土地）であるのに対して、定住農耕民の住む土地は水も豊かないわゆる肥えた土地（余分なものを持つ土地）である。

* 身体

放浪遊牧民のさすらう土地が痩せているのと同様に、遊牧民の身体じたいが既にして痩せている（余分のものを持たない身体）のである。肥え太っているベドウインは、痩せ細っている豚ていどに稀である。過酷な自然環境は、身体に＜余分な＞脂肪などが付着するいとまを与えない。細かく見てみれば、

1. 余分な筋肉や脂肪を付けるに要する必要以上の食べ物がない。
2. 仮に何らかの理由で食べ物があったとしても、彼等の日常生活は、ごく軽いジョギングないし早歩きを連日続けているようなものであるからして、生理的原因によっても痩せざるを得ない。
3. そもそも常に移動している状態では、重い体重では困るのである。従って肥満体質のベドウインがもしいたとしても淘汰されてしまう。余分のものを持っている身体ではやっていけない訳だ。

べつに定住農耕民が全員太っているという訳ではないが、上に挙げた諸点を考えれば、遊牧民よりも太っている確率が高そうである。

* 情緒

情緒という言葉の代わりに精神といたいところだが、＜精神的に余分なものを持つ・持たない＞という表現には無理があるので、ここでは情緒にした。情緒的に余分なものを持つ・持たない、或いは情緒が痩せている・肥大しているということについて観察してみよう。

ベドウインは甚だ感傷的ではない。彼等の印象を一口に言わしてもらうなら、全くドライである。水っ気がまるでない。彼等は情緒的に、ズバリ痩せている。定住農耕民は、これに対して、情緒的に肥大していると言える。後者の典型である日本人は肥大化し過ぎているのかも知れない、と思われるぐらいに、日本人から見ればベドウインは情緒面で余分なものを削ぎ落としている。〔このような見方は、但し、危険な一面を持っている。有りようは、情緒面で何を余分なものとするか・見ないかが、両者の文化の違いなのであって、ベドウインが何か精神的に欠けている

のでは、断じてない。彼等を、余分なものを持たないと見るのも、定住民の生活感覚に照らせばそう見えるということであつて、一方彼等の生活感覚に照らせば、定住民はもう救い難いほど余分なものを抱え込んでいて始末におえないということになるう]。

情緒的に肥大しているか・干からびているかということは、先に挙げた定住民の特性である勤勉・模倣・連帯、遊牧民の特性である怠惰・独創・独立となにほどか関連し合っているとされる。なかでも特に連帯はみずみずしく肥大した情緒無くしては不可能である。連帯は連帯者間で模倣を生み、また相互に勤勉を要求しよう。一方そのような湿っぽい情緒は、怠惰はともかくとして、砂漠で独立して生きて行く上では重荷であろう。砂漠のしからしめる事であるとはいえ、遊牧民は徹底した自立精神の持ち主である。例えば次のような彼等の間ではよく知られた祈りの文句がある。 Oh Lord! Have mercy upon me and Muhammad, but upon no one else besides.

情緒というものは本来、他者（他物）への自己の感情移入によつて生ずるものだ。他者（他物）の中に自己を投影して、他者（他物）の喜・怒・哀・楽のリズムに自己を同調させるのである。ベドウィンは限られた範囲のもの（者・物）にしか感情移入をしないのに対し、定住農耕民はその範囲が広いと言えよう。対象を選ばず、めったやたらに感情移入を行ない、自己を同調させているようでは砂漠では生きてゆけないのだ。農耕民にはその余裕がある。

先の祈りに見てとれるように、ベドウィンにとっては、自己を同調させてもよい他者（他人）は、実に予言者ムハンマドだけである。人間以外の他者（他の生き物）に対してはどうだろうか。ベドウィンの他の生き物への対処の仕方を、定住農耕民の典型である日本人の典型である私の眼から、いわば具体的・体験的・個人的に眺めてみると次のようになる。小犬・小猫・小羊・小山羊・小鳥などの小さな生き物に対して、彼等は、〈マア、なんて可愛いのでしょうか！〉と頬ずりするような感じを持ち合わせていないようだ。私にとっては、この特に〈小〉という要素が、他の〈小〉でない生き物と比べて感情移入の動機となるの

だが、ペドウインではそうでない。彼等は子供でも、何の感情も込めない風にハトの首をひねってしまう。私は、又、大きな凶体の生き物に対しても、何か、哀れみ・共感・同情に似た感情を抱かざるを得ないのだが、彼等はそうでないみたいだ。彼等は子供でも、疲れきって道にへたり込んでしまったラクダに、情け容赦無く鞭の雨を降らせる。ラクダが鋭い悲鳴をあげていてもおかまい無く。また道行く人々はその光景に一顧だに与えはしない。私はこれを見て心底腹がたった。体がワナワナ震えるほどだった。だがこれは、彼等にしたら、ハトにせよラクダにせよ、食用にせねばならない、あるいは労役に従事させねばならない生き物に対して、余分な感情移入をして、自己を同調させてしまつては、到底やっていけはしないのだ。倒れたラクダに鞭を当てても、死にはしないばかりか、使いものにならなくすることもないということをよく弁えているのである。貧しい人達がそんな馬鹿なことをしはしない。労役に従事させる上で、その時そのように鞭を当てるのが効果的だからこそ、鞭打っているのである。仮に私がそのラクダを買い取って、〈ヨシ、ヨシ、ホイ、ホイ〉といたわつてやったなら、ラクダは私を馬鹿にして、全く始末におえない、てんで働かないラクダになってしまうだろう。彼等は総じて人間以外の動物の取り扱いが実に上手だ。（上手であることの質が問題であるけれども）。よく知られた例に、遊牧民の飼っている犬は人間に吠え立てないことが挙げられる。これは日本にいる犬との対比で挙げられるのだが、日本人が飼っている犬は暴虐無人に知らない人間に吠え回す。これは、日本の犬が人間をてんでなめているからである。日本人が犬を飼う場合、犬をいわば人間扱いして、人間と同列に置いている。遊牧民にとってそのような扱いは全く考えられない。

上のような事情が分かっているとしても、しかし、私はそのラクダへの鞭打ちのような光景には到底耐えられないのである。私が、常時ハトを食用にし、ラクダを使役している文化圏に属していないからである。その文化圏では、ハトの首をひねる度にハラハラと涙を流して動揺し、動かなくなったラクダに鞭を当てることを断固拒否するようでは、到底人間の生活が保てないのだ。

私達日本人も、海や川に住んでいる生き物に対しては、彼等に近くなる。水の中に住んでいる生き物を大幅に食用にしているからであろう。白魚を、生きてピチピチしているまま飲み込んだり、海老の生皮をはいで、痛さにピクピクとのたうっているのに、その肌を山葵をすり込んで食べる〈おどり〉と称するものや、一般に〈活け作り〉と言われる本来戦慄すべき食文化を我々は持っているのである。（ベドウインの食文化のなかには、羊や山羊の目玉を生のまま飲み込むというのがある）。

ある文化圏で、その生き物が日常の人間生活上どのような関わりを持っているかが、感情移入の深・浅を決めるみたいだ。このことを証拠立てているのが欧米人の鯨に対する見方だ。かつて鯨は欧米で盛んに捕獲されていた。鯨は、その肉以外の殆ど全てが彼等には貴重な原料となった。（肉は食用にはしなかったみたいだ）。鯨油、ローソク、ペチコート、鯨の耳垢、……。ところが、鯨の原料が使われなくなってきた、したがって鯨を捕獲しなくなり、鯨が日常生活と関わりを持たなくなってしまうからは、とたんに、欧米人は、私がラクダを見るような目つきで鯨を見だしたのである。

私は鯨の肉を食べる事が出来る。しかし、あのものが陸上を跋扈している生き物だったとすれば（大昔はそうだったらしい）、私は到底食べれないと思う。水のなかにいる生き物は平気だけど、陸上の生き物は駄目だという傾向が日本人にはありはしないか。これと逆のことがベドウインに言える。ベドウインは海や川への関心が非常に少ない。海や川でとれる生き物を食用にすることもためらいがちである。アフリカの或る遊牧民は、深刻な蛋白質不足の危機に陥りながらも、池で豊かに獲り得る魚類を食べようとしなないという。アラブ圏最大の都市カイロでの魚の料理法は、ただ一つ、唐揚げだけ。しかも限られた種類のものしか食べようとしなない。蟹、海老、貝などには全く見向きもしない。

かつてサウジ・アラビヤの王様が日本に来たとき、サウジ・アラビヤに無いものでもてなそうと、宿舎の庭に日本風の緑の木々をいっぱい飾って王様にそれを見せたところ、王様は何の興味も示さなかつたという。ベドウインにとっての砂漠・ス

テップと、我々にとっての海・河川とがピタリ照応している。砂と水を入れ替えたらい。砂漠は乾いた海であり、海は湿った砂漠なのか。我々が海を想うようなそのような想いで、彼等は砂漠を想う。彼等が海を想うようなそのような想いで、我々は砂漠を想う。

＜砂漠は海である＞

d. 砂漠は海であり、ベドウインはいわば海賊である。

この表題は、傑出した大アラビヤ学者であった P.K.Hitti 教授 (Princeton University. 1 ページで紹介した参考文献にある古典的な大著、History Of The Arabs 1937 を著した) から引用した言葉である (一語一句同じではない。継ぎはぎしたもの)。これは ghazw (raids、略奪) という風習 (と言うか社会的慣例と言うか) を持っていたベドウインを描くのにぴったりとした表現であるから。さて、その ghazw とは何か。一つの現象として、端的に言えば、(他人の財産を暴力によって奪い取る行為) である。彼等のこの慣例 (但しイスラーム以降はイスラーム教徒どうしの間では行われず、また現代では全く廃れたとされている) を、そのまま切り離して日本や欧米に持って来て、考えるならば、これは考えるまでもなく甚だ野蛮なけしからぬしきたりであるということになる。そしてこのことから、ベドウインの野蛮性・好戦性が指摘されるということにもなる。ghazw を切り離さないで現場に置いたまま検討してみよう。

ghazw の際には、やむを得ない場合を除き、血を見ることはなかった。ghazw はあまねく行き渡った一種のスポーツであると言うことも出来る。ウマイヤ朝初期の詩人アル・クターミーは次の様に歌っている：“.....Our business is to make raids on the enemy, on our neighbour and on our own brother, in case we find none to raid but a brother!.....”。

ghazw は国民的スポーツ、或いは国民的行事さながらであって、キリスト教に帰依しているベドウインですら喜々として行なった。従ってこれは道徳的・精神的価値観以前の次元、より根本的な次元の事柄であったと言える。 [この、キリスト教徒のベドウイ

ンすら行なったということで、ヨーロッパ人からは、だからアラブ人（ベドウィン）はどうにも理解できない駄目人種であると非難されることになる。]

それは前に述べたベドウィンの、〈余分なものを持たない〉という生活上の大原則に由来するのだと私は思う。即ち、もともと限られた貴重な生活物資・財産に対して、

1. 特定の個人が、生活して行く上で必要以上の〈余分なもの〉を持つというのは砂漠では不合理である。結果は、他のベドウィン達に依って、よってたかってむしり取られる。[これは現代のアラブ人の経済先進国への遠慮のない諸要求につながっている感じだ。]
2. 一種の口減らしである。弱々しいベドウィンが一人前に生活物資を保持して消費するのは、その分だけ強いベドウィンの割り込む可能性を奪っていることになる。ベドウィンという種の立場に立つなら、これはまずい。種が栄えてゆく為には望ましくない。[この場合弱々しいベドウィンというものが〈余分なもの〉に相当することになる]。
3. 限られた生活物資・財産を、一人分を必要ぎりぎりな線で抑え、なるべく多数の優秀なベドウィンが分かち持って生きて行くこと、これがおそらく彼等の意識せざる目標、理想状態であつたらう。
4. ghazw は単なる無頼な喧嘩や強盗行為ではないから、血を見ることが極力避けられたのである。見境無く行なってしまうては、種の保存という大前提に悖ることになってしまうので、不必要な ghazw に走らないよう、様々な歯止め：（闘いには強く、但し情け深く．．．．etc.）がかけられていた。相手に対して所構わず攻撃しまくるというのではなく、攻撃するかと思うとサット撤退したり、或いは寛容な態度を取ったりすること（美学！）が期待され、そして良いタイミングでそういう態度を示し得た者は、詩によって称えられるほど高く評価されたのである。

このように、ghazw は決して野蛮な慣習ではなく、砂漠の生活のしからしめるところであつたと言えよう。

e. 砂漠の生活！ ベドウィン社会

基本的単位は家族 (TENT)である。この家族が 20~30 個ばかり集まって氏族 (CLAN)が結成され、更にその上の最大の単位として部族 (TRIBE)がある。

氏族を結成している家族間の結び付きは極めて強かった。氏族の名誉のために！ という感じ。同一の氏族を構成する家族どうしの、この氏族全体への感情は *asabiya* (loyalty) という特別な言葉で表わされるのが常である。ベドウィンは独立心、自立心が極端に強い一方、一切の個人的事情をなげうって氏族のために尽くそうとする傾向をも合わせ持つ。[これははつきりと矛盾である。この両極端の矛盾したものが一人のベドウィンとして体现されている訳である。互いに異なる両極端とその統一。アラブ人の持つこの興味深い特性については後でまとめて述べる。]

ghazw は氏族間で争われる。[だから氏族内での結束が強かったのだ]。氏族は共通の battle cry を持っていた。氏族の族長はシエイフと呼ばれる。しかしシエイフは絶対的権限を持っている訳ではない。重要な事を決めるときは家族の長が集まる会議に諮らねばならなかった。その意味でかなり民主的であった。婦人も定住民と比較して、イスラーム前後を問わず、かなりの自由を享受していた。一夫多妻ではあったが、夫を選ぶ自由と離婚する自由があった。

氏族内の殺人事件は氏族内だけで処理される。氏族外の殺人事件(別の氏族の者に殺された場合)は<敵討ち>がなされる(なされなければならない)。

氏族が集まって部族が結成されるが、部族を結成する氏族間の結び付きは総じて弱い。部族間の大規模な争い(戦争)のとき、いわば臨時に団結するという感じである。氏族を構成する家族間の絆の強さに比べたら物の数でない。なお、水と牧草は部族の共通財産である。

ghazw を歌った (p.20 の4.参照) おびただしい数の詩のなかに、砂漠の生活に於いてベドウィンが理想的だと考える人間像を窺うことが出来る。それによれば、

1. 肉体的な諸力に秀でていること。

- 2.ラクダや馬を操るのが見事であること。
- 3.武器の扱いが見事であること。
- 4.弁舌爽やかであること。[ベドウインは雄弁をなにものにも勝る武器だとした。]
- 5.何者をも恐れず、誇らしく高らかに、自立していること。

こういう人物が勇猛果敢に闘い、悪鬼のごとく暴れまわるとともに、天使のごとき優しさを示す[ここのタイミングが実に難しい!]、或いはまた氏族への asabiya を固く守って我が身を犠牲にする、そういう物語りに聴衆はしびれるのである。

② 南西部（ヤマーン地方）の定住民

この人達は、先にも述べた様に、半島の中央部・北部のオアシスや一部海岸地帯に定住していた人々とは根本的に異なる。後者はもともとはベドウインなのであって、ある事情でそこに定住するようになっただけである。例えば、メッカの定住民は、メッカの機能・役割が拡大して物物交換の場としてこれを取り仕切るため常時そこにいる人々が必要とされて定住したのであって、自分達がもともとはベドウインである事を自覚していた。

さて、アラビヤ半島南西部の定住民はベドウインとははっきりと異なっている。一方が定住、他方が遊牧ということの他に、より根本的に、言語・文化・体型が異なっているのである。（但し、ベドウインもヤマーンの人々も互いに sister races であって、同じくセム語族に属している。）ところでこの南西部の定住民は South Arabians（南アラビヤ人）と呼ばれることが多い。

ベドウインと南アラビヤ人との比較

ベドウイン	南アラビヤ人
主として遊牧	定住
長頭型	短頭型
アラビヤ語	ヒムヤル語
世襲君主政体ではない	世襲君主政体

③ 南西部（ヤマーン地方）の諸国家

a. サバア王国（B.C.950～B.C.115年）

記録上の最古の国家ではないが、この地方で最も代表的である。サバア王国に関する最も古い記録はB.C.715年のアッシリヤ語の碑文である。首都はSIRWAH、後にMARIB。このMARIBにダムが造られて農耕が栄えた。史上最初のダムであったと言われている。このように高度の文明が栄えるためには、二つの条件が必要である。即ち、1.そこ自体の豊かさ・・・雨の多い肥沃な土地であった。2.他との交通の便・・・紅海の狭い部分を隔ててアフリカ大陸と接し、アラビヤ海に面してインドとの交通の便があった（このインドとの交通にはモンスーンが利用された）。また当時の文明国エジプトへの、半島西海岸沿いのメッカ、ペトラを経由する陸上の交通路もあった。

ダムを利用した豊かな農産物と土地独特の産物である各種香辛料（香辛料の用途は、料理面では腐りかけの肉類を食べれるようにするため、また料理面に劣らず、宮廷での儀式や宗教上の儀式で重宝された）を輸出品としてアフリカ、インド、エジプトと交易を行なって大いに栄えた。サバア王国への輸入品は、真珠（ペルシャ湾）、織物（インド）、絹（中国）、象牙・鳥の羽（アフリカ）等であった。（こういう輸入品を見れば、これらは贅沢品であって、生活になくはならないものではない。如何に栄えていたかが分かる。）

サバア王国は近隣を圧したが、それは通商・貿易による制覇であって軍事力による征服ではなかった。

b. ミネア王国（B.C.1300～B.C.650年）

南アラビヤ人の建てた記録上最も古い国である。首都はQARNAW。サバア王国の存続期間と比べてみて分かるとおり、サバアとミネアとが並立していた期間があった。B.C.650年にミネア王国がかすられてしまい、サバアの天下となり、そのときサバアの首都がMARIBに移ったのである。B.C.650～B.C.115年のこの後期サバア王国の時代がヤマーン地方の黄金期であった。

c. ヒムヤル王国(B.C.115~A.D.525年)

B.C.115年頃サバア王国を押しよけて舞台に上がってきたのがこのヒムヤル王国であった(上記三王国を建設したのは同一の民族で、言語も同一)。首都はZAFAR。この王国の時代の出来事として、紅海の対岸に属国のアビシニヤを建設したことが特記される。

A.D.4世紀に入るとユダヤ教とキリスト教がヒムヤル王国内に広まった。ユダヤ教の方が勢いがよく、6世紀の初めに国王がユダヤ教徒になるに及びキリスト教徒との間に対立が深まった。

一方植民地のアビシニヤではキリスト教の方が圧倒的に勢力が強く、ヒムヤルの国王がユダヤ教徒になったのを契機にキリスト教を奉ずるアビシニヤ王国として独立した。

間もなくアビシニヤはヒムヤル王国内のキリスト教徒を保護すると称してヒムヤルに攻め込み、ユダヤ教徒のヒムヤルの国王が戦死して、A.D.525年ヒムヤル王国は滅んだ。

d. 525年以降のヤマーン地方

ヤマーン地方に於けるアビシニヤの主権はA.D.525年から575年まで50年間続いた。575年にサーサーン朝ペルシャに征服されその統治領となった。サーサーン朝はキリスト教のビザンチン帝国との抗争で、キリスト教憎しで、ここを征伐に来たのである。

* ユダヤ教、キリスト教が入る以前のヤマーン地方の南アラビヤ人達の間に見られた宗教は星々を神々とする多神教であった。月の神(SIN)が最高神で男性、太陽神(SHAMS)は女性で月神の妃であり、金星神を初めとする他の星々を産んだという。[この地方でもやはり夜の方が昼より有難いし、主となっている。交通の方向は星々の位置に依るので生活を委ねている感情があるであろう。]

(3)
9/6

IV アラビア語について

① アラビア語の外面的雑感

アラブ人はアラビア語を非常に誇りに思っている。彼等はアラビア語を極めて高く評価し、世界一の言葉であると思っている。イスラームがアラビア半島の外部にも広まり、アラブ人が当時のヘレニズムの余波を受けた文化圏に進出して、様々な分野で外部の文化を積極的に採り入れた時も、一つ言葉だけは例外であった。天文学などの理科系の諸学は言うまでもなく、哲学なども好んでアリストテレスの哲学を受け入れたが、詩に代表される文学・文芸の面では外国のもの（主としてギリシャ文学）に何の興味をもしめさなかった。彼等はアラビア語、又それによる文学・文芸に匹敵するものなしと思っていたのである。

英国、米国、オーストラリアetc.のように英語を国語とする国同士はそうでない国々よりも互いに親近感を抱き合っている。しかし国語が同じだからといって彼等のそれぞれの国家意識が薄まるということはない。ドイツとオーストリアの場合も同様である。ところがアラビア語を国語とする約20のアラブ諸国の場合は異なる。これらのアラブ諸国はいつの日か単一国家になろうと熱く希求している。現在あるアラブ連盟がその基盤となっている。国語のアラビア語が共通だという要素の前では、これら諸国のそれぞれの国家意識が極めて薄くなっている。アラブ人の思考のなかでは、アラビア語という比重が極めて強いのである。

アラビア語はムハンマド時代まではアラビア半島でしか話されていなかった。もともとベドウィンの言語である。イスラームがアラビア半島の外に拡まるとともにアラビア語も半島の外に出ていった。こうしてアラビア半島の外のイスラーム化とアラビア語化は同時に進行した。しかしこれは最初だけで、新たな征服地が本拠地のアラビア半島からだんだん遠くなるにつれて、イスラーム化は行なわれてもアラビア語化は定着しなかった。今日ではアラビア語は土着民がもともとセム・ハム語系の言語を話していた国々にだけ根を張ることが出来ている。例えば、シリア（セム語系のアラム語に取って代わった）、エジプト（ハム語系のコ

プト語に取って代わった)、北アフリカ一帯(ハム語系のベルベル語に取って代わった)など。アラビヤ語の飛び火地帯もある。即ち、ジブチ、ザンジバル、マルタ島がそれである。

クルアーンは6世紀にメッカ地方で用いられていたアラビヤ語で書かれている。このクルアーンのアラビヤ語が以後永く今日まで文章体アラビヤ語の基本となっている。クルアーンのアラビヤ語は現在のアラビヤ語と全く同じとはいえないが、その差は少ない。一つの国語の書き言葉が1400年を隔ててあまり変わっていないということは驚きである。

アラビヤ語を母国語とする人達は、言語に対しても音楽に対しても、本質的には同じような反応を示す。文語文による詩の朗読や演説がなされる時、その僅かな一部分しか理解できないような無教養のアラブ人でもその朗読や演説を耳にして深い感動に浸るのである。アラビヤ語のもつ独特のリズム・韻・音楽性に魅了されるのだ。アラビヤ語自体が芸術的鑑賞に耐えられると言えよう。ふつう、言語は理性に訴えるはずなのに対し、アラビヤ語の場合は感情に訴えるのである。情報を正確に伝達するという要素の他に、それにプラスアルファするところの余韻という要素(多かれ少なかれ全ての言語にある)がアラビヤ語ではずば抜けて強いと言えよう。頭よりも心に訴えるわけだ。つまり、情報の乾いた正確な伝達という面に加えて、その伝達文(語)自体の音楽的効果が楽しまれるということは、ややもすれば、頭よりも心、正確な伝達よりも、より音楽的効果ある伝達という方向に傾きやすいのである。

かくしてアラビヤ語ないしアラビヤ語による作品などの言語活動に於いては、一般に、

a. 各種の強調(誇張)が安易にされる向きがある。例えば日本語で、<ムハンマドは勝った>とごく普通に表現されるべきところで、アラビヤ語では、<まことに彼、ムハンマドは勝った>というような表現になるのである。

b. 反覆が多く見受けられる。このことは、話者がそのメッセージの全体のまとまりに意を用いるよりもむしろ、メッセージ中の一部を凝視してしまうことによるのだと思う。メッセージを構成

すべき諸点を総合的に組み立ててメッセージとするよりも、むしろそれらの諸点の一部を反覆することによってメッセージ全体に至ろうとする（これは正にクルアーンの特徴そのものでもある）。欧米の批評家によるアラビヤ文学の評価でも、例えば小説の場合、部分部分の描写にたけていて、物語り全体としてのももなかりかける傾向があるというような指摘がなされている。欧米の価値観を基準とすればそのように言えるであろうが、アラブ人にとっては何もそんな価値観なんか知ったことでは無かろう。要するにものの考え方が違うだけである。音楽や美術の方面での、例のアラベスクとして知られているものはアラブ人のこのような感覚の所産である。

c. 話者がそうあって欲しいと願う未来の願望を、あたかも既に実現してしまっている事実として述べるようなアラビヤ語の形式がある（これはアラビヤ語の時制の用法による）。アラビヤ語の独特の時制によるこのような現象は、ヨーロッパ語から観るとアラビヤ語の乱れとして映るようだ。アラブ人の日常生活によく見受けられる、時間を守るという観念の不足が、欧米ではこのことと結び付けられて論じられている。だがこれはクルアーンの美しい教義、現に神我とともにいます・人間は既に救われてしまっているに結び付きもするのである。

d. 話者がそうあって欲しいという未来の願望が既に実現化した事実として述べられる傾向があるからして、何か望ましいことは口に出しさえすれば気持が済む。激しい反覆された呪い、強調され反覆された祝福も話者はそれによって気持ちが済んでいるので、実際の行動を伴うことは稀である。この点をアラビヤ語を話す人達と交渉するとき頭に入れておかねばならない。まあ、良きに付けあしきにつけ、言う一ばっかりという面が出てくる事は否めない。この種の悪口を他人の口を借りて続ければ、例えば、「アラビヤ語には大げさな誓いや脅しが氾濫している。その誓いや脅しが実際になされるかどうかは、また別の次元のことであるらしい。言っただけでも気が済むという言葉による行動の代行が著しい」。など、など。

10

9/13

② アラビア語の特徴

さて次にアラビア語の実際の語学的特徴を概観してみよう。
(ちなみに現在アラビア語は国連の公用語の一つである)。

a. Consonants が非常に多く、Vowels は非常に少ない。

b. 全ての単語の基本的・潜在的意味は、1個～4個の Consonants の組み合わせのみによって (つまり Vowels はこれに関与しない) 担われている。[1個～4個の中で3個の組み合わせが圧倒的に多い]。Vowels の役目は単語の基本的・潜在的意味に様々な Variations を与える事であり、且つ発話に依って現実化することである。例えば、KTb という組み合わせには、字などを書くという基本的な意味が潜在しており、これに Vowels を付加させて、

- * KaTaBa (彼が書いた)
- * KuTiBa (それが書かれた)
- * KiTaB (一冊の本)
- * KuTuB (三冊以上の本)
- * KuTuBi (本屋)
- * KiTaBi (written, literary)
- * KaTiB (作家)

などの Variations が出来て、これを発話することにより単語として現実化する。[アラビア語の文字は全て Consonants を表わし、Vowels を表わす文字がない。つまり書かれているものは全て Consonants だけであるから、それを読むときには読む人が適当に Vowels を補いつつ読まねばならない。] 以上のは Vowels のみを付加させた例をとったが、ある一定の Consonants をも付加させれば、

- * KaTaBaT (彼女が書いた)
- * YaKTuB (彼は書く、彼は書くであろう)
- * YaKTuBuN (彼等は書く、彼等は書くであろう)
- * KiTaBaT (書くこと)
- * KuTTaB (Quran school, lowest elementary school)
- * KuTaYYiB (小型の本)

- * KaTiBaT (文書)
- * MaKTab (事務所)
- * MaKTabaT (机、図書館)
- * MiKTab (タイプ・ライター)
- * MuKaTaBaT (文通)
- * MaKTuB (手紙)、 などなどの単語が出来る。

c. 冠詞には一応、定冠詞と不定冠詞の別があるが、形としてあるのは定冠詞だけで、不定冠詞は発音に依って示されるだけである。例えば、aL-KiTaB (アル・キターブ) KiTaB (キターブ)

d. 名詞の性には一応、男性と女性の別があるが、殆どの名詞は男性名詞であり、女性名詞は次のようなものに限られる。(換言すれば、名詞は原則として男性であり、次のようなものは例外として女性として扱われるのだと言ってもよい)。

- * 自然に意味の上から女性のもの(例えば、娘、花嫁)。
- * 国名、都市名(例えば、エジプト、ダマスカスなど)。
例外的に女性名詞でない国名もある(例えばアル・イラク)が、これでも場合によっては女性として扱われる。即ち、Triptote の時は男性、Diptote の時は女性。
- * 人間や動物の身体の器官で対になっているものの名称。
(例えば、目、手など)
- * (本来の意味での)ごく少数の女性名詞(例えば、火、魂、大地、太陽、家など)。

e. 数には、単数、双数、複数がある。双数は、一般に、対をなしているものに用いられ、対をなさないものは、二個あっても複数が用いられる傾向にある。ただし二個を強調する場合は対をなさない時でも双数が用いられる。ある名詞の双数形はその単数形にごく簡単な変化を加えれば出来る。双数形は限定された特殊な用法であると言える。単数(あるいは双数)と比較すれば、その複数形は極めて複雑である。一つの単数形に複数の複数形があったり、複数形の更に複数形があったりするのだ。

f.格 (Case) には、主格 (Nominative)、屬格 (Genitive, 所有格 Possessive)、対格 (Accusative, 目的格 Objective) の三格がある。面白いことには、主格は音が U で終り、屬格は I、対格は A で終わる。この A、I、U はたった三つのアラビヤ語の Vowels に相当する。

g.アラビヤ語では、英語のようど、いあゆるハ品詞、即ち名詞・代名詞・形容詞 (冠詞は一種の形容詞)・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞の別をつけることも一応は可能である。しかしアラビヤ語に於いては、

- * 名詞と形容詞とは厳密には分かち難い。形容詞は全て名詞としても扱ふことが出来る。(英語などでも形容詞に冠詞を付けて名詞にしたりするが、アラビヤ語では冠詞云々でなく、全て形容詞はそのまま名詞でもあるのだ)。また英語では形容詞を用いて表現するような場合でも、アラビヤ語では名詞によって表現されることが多い(数個の名詞を連ねて一個の形容詞の効果を出したりして)。
- * 本来の副詞は極めて少なく、総じて副詞としての表現効果は、名詞に手を加えて(その名詞を対格に置いたり、前置詞と繋げたりして)出している。対格に置いた名詞を副詞として用いる度合いが極めて高い。つまり、一口に言えば、副詞の働きが名詞によってなされているのである。
- * アラビヤ語には状態動詞(形容詞の内容を持つ動詞)が極めて多い。例えば、KaTHuRa (多い [多くある])、KaBuRa (大きい)、KaMuLa (完全である)、SHaRuFa (高貴である) など。このような内容は英語などでは普通、形容詞で表現されるのだが、アラビヤ語ではここに示したように動詞で表現されるのである。つまり、一口に言えば、形容詞の働きが動詞によってなされているのである。
- * 先に副詞のところ、本来の副詞が極端に少なく、名詞に手を加えて副詞としての表現効果が得られると言ったが、動詞によっても副詞的な表現効果が得られる。英語などでは普通、動作は動詞で、そしてその動作のなされ方のニュ

アンスは副詞で表現されるであろう。ところがアラビヤ語では、動作と動作のなされ方のニュアンスとを同時に一つの動詞で表現するのである。或る一つの動詞は、その動作のなされ方のニュアンスに応じて普通10個の派生形を持っている（例えば、QaTaLa [殺す]、QaTTaLa [酷く殺す=虐殺する]、TaQaTaLa [互いに殺そうとする=戦闘する]など）。このようにアラビヤ語では相当の度合いに於いて副詞的表現が動詞でも表現される。つまり、一口に言えば、副詞の働きが動詞によってなされているのである。

- * アラビヤ語には助動詞はない。英語などの助動詞に相当するものはみな動詞そのものを用いる。これもまた、いわば、助動詞の働きが動詞によってなされているのである。

かくしてアラビヤ語では結局のところ、名詞と動詞との二つが圧倒的に強く、多く用いられるわけで、アラブ人学者による伝統的なアラビヤ語文法書では、品詞は名詞、動詞、小詞の三種だけに分割されているのも頷けるであろう。

h. アラビヤ語の動詞については充分注意しなければならない。英語やフランス語などの、いわゆるインド・ゲルマン系の諸言語に於いては、動詞では時制が要となっている。ところがセム系の諸言語（アラビヤ語がこれの代表格）では、動詞に於いて時制はいわば刺身のつまのようなものに過ぎない（時制表示そのものが形態的に貧弱である）。アラビヤ語では、＜動作の行なわれ方＞が最も重要なのである。そしてその動作が、

- * 既に完結してしまっているのか、或いは、
- * 未だ完結していないのか、が要となっている。

或る一つの動詞は形態的に前者の形（完了形、Perfective）と後者の形（未完了形、Imperfective）を持っている。仮に、アラビヤ語の文中である動詞が前者の形で出ている場合、それを現在・過去・未来の時制と結び付けたければ、次のような適当な操作をすれば良い。即ち、文脈上これは時制的には過去だと思えば、過去に於いて完結した動作を表わしているのだと解し、文脈上現在だと思えば、現在時に於いて完結してしまっている動作だと解し、

未来だと思えば、既に終わったと見なしてよいぐらい確実な未来の動作を表わしているのだと解するのである。アラビヤ語の文中で仮に後者の形で出ている場合、上と似たような操作をすれば良いのである。

動作の完結・未完結の観点に由来すると思われるが、ある事態が確実だとされる場合には前者の形が用いられ、不確実だとされる場合には後者の形が用いられる。

或いは又、事実をありのまま端的に述べるのは前者の形に依り、そうでない時には後者の形に依る。

二つの動詞をそれぞれ前者と後者の形に置いて、前者で以て状況の主動作を表わし、後者で以て副動作を表わす。(例えば、殺すと笑うがあつた場合、殺すを前者にして笑うを後者にすれば、笑いながら殺すとなり、逆にすれば殺しながら笑うとなる。〔～しながらという文句を必要としない〕)。

(動詞の場合も、前者と後者の二つに両分されて、しかも各々がくつきりと対立しているではないか！)

i. 同一の単語に正反対の意味！ アラビヤ語では同一の単語が互いに矛盾する正反対の意味を持つという言語現象が無視できない頻度で観察される。このような単語は昔のアラブ人の文法学者達も好んで議論の対象とし(これらの単語は一括してアッダードと呼ばれた)、様々な考察を加えている。実例をお目にかけて、

* raghiba (欲する：欲しない)、〔以下アラビヤ語の方ははしょって〕(好む：好まない)、(喜ぶ：悲しむ)、(表わす：隠す)、(売る：買う)、(泣く：笑う)、(留まる：立去る)、(近づく：遠くなる)、(同じもの：対立するもの)、(主人：奴隷)、(勇ましい：おずおずした).....

* 但しこのアッダードは無数に見出される訳ではない(あたりまえ!)。アラブの伝統的文法学者達によれば、大体 500語近くあるという。彼等はアラビヤ語の美しい美点としてアッダードを愛する傾向があつて、ややもすればその数を水増ししようとするのが見てとれる。彼等の挙げているアッダードはかなり批判

の対象となり得る。正しくはアッダードと呼べないようなものも数え入れている。こじつけみいたいなものも少なくない。例えば、一方の意味は確かによく使われるが、それに対立するもう一方の意味の方は使用頻度が極端に少ないとか、或いはその用例が不確かであるとか、……。また他の言語でも（日本語でも）よくあることだが、愛情の表現の一つとして、例えば、〈この馬鹿！〉と言ったり、非常に出来の悪い学生を指して、〈この優秀な学生さんが、。〉と言ったりすることはよくあることであろう。こうしたとき、馬鹿とか優秀などがアッダードである訳ではない。こんな感じのものもアラブの文法学者の中にはアッダードにしている人がいるのである。このようなこじつけ、ないし正しい意味でアッダードだと言えないものを除くと、アッダードは大体 200 単語あると考えられている。多かれ少なかれ全ての言語はこのアッダードに相当する現象を持っているのであるがアラビヤ語には異常に多いのである。

* さて、このアッダードの存在をどのように考えるか。一番簡単なのは、例えば ishtara (売る：買う) の様に歴史的背景から説明できるものである。こういった簡単に説明できるものを除いて考察してみよう。アラビヤ語的な感覚では、対照的な状態・行為・動作の一方のみに目を止めて、他方と分別して捉えるのでは無くて、互いに対立した要素を含むままに、いわばニュートラルなものとして捉えて、それを一語として表現させるのではなかろうか。言い換えれば量子力学上の〈シュレーディンガーの猫〉の様に、辞書的には対立を含んだまま双方のどちらつかずの状態にあり、実際の文の中で初めてどちらか一方に固定されるのである。ちょうど猫が人間が観察して初めて生か死かのどちらかに固定されるように。

11

前期了

9/20

* S. Freud (1856~1939) もこのような言語現象に興味を持った。彼は夢の研究をしているうちに次のようなことに気付く。即ち、夢ではしばしばある一つの具体的な物が互いに正反対の意味・意義・価値・道徳（不道徳）性の象徴として表れて来るということに。例えば一本のハンマーが正義の象徴として、同時に又不正の象徴として；或いは又一本の美しい花が純潔の象徴として表れるかと思うと、その同一の花が純潔でないことの象徴として表れるのである。（このことは言い換えれば、夢の中に出てくる一つの事象が、互いに相反し矛盾する二つの意味を持っていると言えるであろう）。相対立する二つの意味が夢では頻繁に一つのものとして表現されるということに気付いたフロイトは、更に、原始的な古代言語では相対立する二つの意味が頻繁に一つの単語で表現されるという言語学上の一学説があることを発見して驚く。（ここで言うその原始的な言語とは古代エジプト語を指しているのだが、それをセム・ハム系諸言語のうち最も代表的なアラビア語に置き換えて、アッダードという言語現象があることを既に説明した）。ちなみに、このアッダード的な現象に驚いたのはフロイトだけではない。デンマークのうんだかの有名な大英語学者の O. Jespersen (1860~1943) もヨーロッパの子供の言語使用の中にそれを見出して興味を示した。イエスペルセンは用例とその分類に主にかかずらあって、何故そのような現象が生じるかについては深く考察していないが、フロイトは原始的な言語で精神生活をおくった古代人の内面に立ち入って考察している。（今日では、当然にも、言語の原始性とか古代人ならば即未開人であるといった類の論調は全く馬鹿げているとされている）。さてフロイトによれば、例えば、人がある何かのものを美しいと感じてしかる後それとして表現し得る時には、必ずその反対の美しくない、即ち醜いという感情が了解されかつ表現され得なければならない筈であり、逆に何かのものを醜いと感じてしかる後それとして表現し得る時には、必ずその反対の醜くない、即ち美しいという感情が了解されかつ表現され得なければならない筈であるという。考えてみればこれは当たり前の話で、善を了解するとき人は悪をも了解し、熱いと言える時には冷たいのがどういう状態かを言える

時であり、閉めてくれというときには開けてくれといったらどうなるか分かっている時であろう。さて彼によれば、このような善・悪、熱・冷、開・閉というような対になった概念がそれとして分別して固着する以前に、両者がいわば無分別に融合しているような状態があるのだという。分別的固着は人間の意識の世界、覚醒の世界でのことであり、無分別的融合は無意識の世界、夢の世界のことであるという。このような考え方の裏には、一方の側に無意識・夢・子供・未開・原始・古代 etc.を置きそして他方には意識・覚醒・大人・発達・文明・現代 etc.を置くというヨーロッパ人特有の進歩史観的二分法がある。フロイトにとって人間が見る夢はその人間の原初的且退行的な状態に基づいた欲望の反映であってみれば、原始的な古代言語に無分別的融合が見出されるという説を発見したときには自分の夢学説の正当性が実証されたこととさぞ嬉しかったことであろう。

* 善という観念のすぐ裏側には悪という観念が張りついている。悪の裏側は善である。どちらか一つしかということはない。従って善という言葉についても同様である。善という一つの言葉は実はこの言葉自体で悪という観念をも根源的には表わしていると言えるのではないか。現代・理性・明晰・覚醒の世界では一語だけでは不便でそれに含まれる二つのベクトル（善と悪）が固定されねばならないが、古代・感情・曖昧・夢の世界では二方向のベクトルが固定される必要はなく、かえって、根源的なドロドロと動いている観念・言葉のままである方が都合が良いということなのでもあろうか。故に、例えば、善いという単語は本来善い・悪いの善いを意味したのでもなく悪いを意味したのでもなく、むしろこの二つのベクトルの関係と差異を意味したのであると思われる。

* アッダードの中には、よく観察してみれば時間的な順序に関わっているものがある。例えば nahil(泉に行く人：泉から帰る人)。泉に水をくみに行けば、いつかは泉から帰らなければならないであろう。行くのと帰るのとは正反対であるから、これはアッダードの中に数えられている。しかしこの種のアッダードに対しては今まで述べたような形而上学的な苦しませの考察を行なう

必要はない。この種のものはアラビヤ語の一つの特徴から直ちに説明できる。アラビヤ語ではある行為とその結果の間を区別しないというか、その結果ぐるみで行為を捉えようとする傾向がある。例えば rakiba という単語は、自転車や自動車などにまたがる、運転席に座るという行為を意味するのみならず、（その結果として）自転車をこいでいる、車を転がしているということをも意味する。同様にしてアラビヤ語では、立ち上がる：立っている、思い出す：覚えている、手に入れる：所有している、止まる：止まっている、（ラクダなどから）降りる：（その結果その場所に）留まる、着席する：座っている、などなどみな一つの単語で表わされるのである。従って泉に水くみに行くという行為をする人は、その結果として泉から水を持って帰ってくる人であり、こうして同一単語で表わされるのだ（ここでは偶然に意味が正反対になっているに過ぎない）。

* 行為をあらかじめその結果をもふくみとって捉えようとするアラビヤ語の特徴は、即、アラビヤ（イスラーム）思想にもろに直結してくる。例えば sadaqa は義を意味するが、これは同時に幸福をも意味する。日本語の感覚では義と幸福とは一応別物であろうが、正義はその結果として幸福をもたらすのであって、従ってアラビヤ語の感覚では義と幸福とが一語に結晶するのである。アラビヤ語（イスラーム）の感覚では、義 = 幸福の等式が成り立っている。同様に、罪 = 罰、悪行 = 破滅。また、愛（愛する）はその結果ぐるみのものであって、従って例えば神への愛は、その愛の実践的活動を伴わないでは愛そのものとして成立しないのである。アラビヤ・イスラーム思想が極めて实际的、現実的なのはこのような出発点自体にすでに根ざしていることである。

[動詞文と名詞文、フスハとアンミーヤなどまだまだアラビヤ語の特徴として興味深いものがあるが（これらはいずれも二つの対立的なものに両分されるという特徴を更に強める類のものである）、このあたりで馬首を転じて先に進もう。]

V クルアーン・・・・アラビヤ的思考の結晶

今まで見てきたアラビヤ語の諸特徴は奇妙なまでにアラビヤ半島の風土を反映している。半島内部の極端な乾燥・沿岸部の多湿；昼間の暑熱・夜間の寒冷；大空と大地；砂と水（砂漠とオアシス）などの中間が無い両極端の二分性・対立性がアラビヤ語の中に見てとれるではないか。この風土はまたアラビヤの人間にも反映されている。同じ一人の人間が見せる度外れた親切と容赦の無い敵意；極端なけちりと大盤振舞などの中間が無い両極端の二分性！そして又、アラビヤ人とアラビヤ語とは相互に拡大再生産的にそのような特徴を助長してきたことであろう。

さてクルアーンでは：

- ① 天国と地獄の描写は前者の楽しさと後者の辛さとにおいてまさに両極端である。勿論キリスト教にも天国と地獄の思想が有るが、その描写は実にあっさりとしたものである。このことは聖書を読めばすぐに分かる。
- ② 神は人間に対して完全な主人であり、一方人間はその主人に文句無しに奉仕を要求される完全な奴隷である。ここで奴隷という言葉は修辭的に使ったのではなく、クルアーンではまさに奴隷という表現そのものが用いられており、それは紛れもなく人間の別名なのである。
- ③ 神は人間に対して、ある時は恵みをおしみなく注がれるかと思うと、次の瞬間ガラリと手のひらを返していともあっさりと厳罰を加え給うのである。
 - a. 神が（或いは又アラビヤの人達が）両極端の一方をとった場合、それに偏しないで他方へとフィード・バックというか、バランスをとるといふか、容易に帰ってこれるのはどういうわけなのだろうか。これは、一方に偏しすぎることなくバランスを容易に保ち得るといふ天性の資質の所有者のみがこの両極端性をとり得るとも言え、そのような優れたバランス感覚の持ち主であるからこそこのような二分性が可能であるとも言えよう。

b.この事は前に見たアッダードに象徴的に示されている。一つの単語で相対立する両極端の意味を表わすという現象は、一見相対立して見えるものを対立のままに固定して考えないで、流動的に、AならAを、Aだけで捉えないで、non-Aという要素も考えの上に入れて捉えようとする精神の所産ではなかろうか。同様にして行為をその結果と切り離して捉えないで、結果ぐるみで行為を考えようとする精神の所産ではなかろうか。アラビヤ語は動詞でも名詞でも流動的であり、固定的では断じてない。こういう言語を操る民は、そのものの考え方も極めて流動的であろう。言語は眼鏡であるが、このような流動的な眼鏡で現実世界を切り取り、濾過して得られたものは又かならず流動的なイメージであろう。

c.日本語で<神>に相当するアラビヤ語は<イラーフ>である。日本語の感覚では、神はなにほどこか静態的でまた或る一つの固定した形をとっているものとしてイメージされようが、アラビヤ語の感覚では、イラーフはなにほどこか動態的でいわば或る種のエネルギーのようなものとしてイメージされているのである。同様にして、例えば、「何が一番大切ですか」、「それは金です」というようなよくある会話にしても、アラビヤ語的な感覚をそのまま日本語に置き換えてみれば、「何が一番大切ですか」、「それは生きつつあるということです」となるであろう。

④ キリスト教では神と人間の間にはイエス・キリストという両者を結ぶ媒介者がいるが、イスラーム<クルアーン>では何の媒介者もない。ムハンマドは完全に普通の人間であるとされる。神と人間は中間の無い両極端なのである。

a.キリスト教に於ける神による人間の救いはイエス(神にしてかつ人間であるキリスト)の仲立ちに依る。キリスト教に於いても神と人間は両極端である。だがその両極端のものの中に両者の特性をあわせ持ったもの(キリスト)を介在させることに依り両者の調和(人間の救い)が図られている。

b.このように異なったものの中に中間項を置いて全体の調和・整合をしていこうとするのが印・欧式の思考の特徴である。これは全体という立場が好んで尊重され、全体としての構図が優先される思考である。そこではどんなに異なったものどうしても、適

当な補助線（中間項）を引いて、全体としてまとまったものにするという思考の遠近法が有る。

c.このようにして極端なものどうしは、例えば最初の原色の二色の際立った対立が、中間色を介在させることにより優しい対照を示し、又そのような中間色を数多く介在させるならば全体としてなだらかな色彩の変化になるように、媒介者によってその極端性の棘が抜かれるのである。

d.さて、では、イスラーム<クルアーン>に於ける人間の救いはどのようにして得られるのであろうか。印・欧的思考では、両極端のものの中に第三者を配置することによって改めて三個のものとの間の関係を定め、それによって最初の両者の関係の質的転換を図るのだが、クルアーン的思考ではそのような第三者なるものは金輪際無い。クルアーン<イスラーム>に於いては両極端の対立の質的転換を図るものを両者の外に求むべくもないとすれば、その対立している両者そのものの中に求めるしかないではないか！ 対立が対立したままで、極端が極端であるままでそのこと自体を調和であるとする思考の飛躍を行なう他ない。印・欧的感覚からみればこれは不自然であり非合理であるかも知れないが、イスラーム<クルアーン>に於いては調和（救い）はこの方法によるしかない。

e.しかしこのことは人間の側に諦めを要求することではない。このあたりからは個人個人の信仰の問題となり多くは語れないが、一言しておく、事は主人と奴隷とを同一の単語で表わし得るアラビヤ的感覚を背景としているのである！ クルアーンのテキストに於いては奴隷（abd）は人間の別名であるとかちりと固定されているが、主人であること・奴隷であることの関係性は上述したように流動的な性質を持っていることを忘れてはならない。だから永いイスラームの歴史の中で、異端とされてはいるが、アナアッラーフ（私が神である）と叫んだ一派が出たことは別に不思議ではない。（私が神であるとは、私が神様で他人はみな私の奴隷だというような意味ではなく、人間という現象、より精確には私という現象の中に神は十全に表れ出ているとする思想的立場の表明である）。

⑤ 絵画や音楽で、ある小さな模様ないし短い旋律を無限に反覆させて行く手法をアラベスクという。これはアラブ風（アラビヤ風）という意味である。アラベスクには先に述べたような流動性がよく表れている。アラベスクというものは模様や旋律の動きに乗って初めて味わいが出るのである。ここでは或る視座から全体として捉えるという態度は拒否されている。そういう静的なものではない。全体もなければ視座もない。遠近法はない。全体というものは、これを全体と見なそうという限定・固定化が先立って初めて成り立つ。視座は文字通り固定化である。部分（全体という観念が薄いので部分という言葉はあまり適当ではないのだが）が果てしなく動いてゆくのであって、その動いてあること自体が喜びなのである。その動きは反覆が多いがちっともそれに飽きない；即ち動きそのものが喜びなのである。もし動きに飽きるとすれば、それは全体的視野から見ているからである。動きに徹すれば常に新しいのである。

a. クルアーンの構成自体が既にアラベスクになっていると言える。英国の劇作家 G.B. Shaw (1856~1950) はクルアーンを「世界で最も退屈な書物」であると毒づいたが、別に高名な劇作家の目を待たないでも、印・欧や日本のごく普通の大抵の人が普通にクルアーンをひもといて目を走らせる時に漏らす印象はそれに近いのである。物語的展開がない・前後の脈絡がない・同じことの頻繁な繰り返し等などがすぐに見てとれる。だがこれはアラビヤ的感覚に乗っ取った実に偉大な書物である。全体などというけちなことにはめもくれないから物語としての展開に乏しいのは当然である。個物への凝視が強いから個物間の前後の脈絡などは薄くなるのも当然で、第一脈絡などは全体を志向して初めて意味が有るだけだ。数少ない本当に大切なこと・最も大切なことがずばりと表現され、その美しい「模様」・「旋律」が限りなく繰り返されてゆくのである。おまけに前後の脈絡がないとすれば、その都度その都度新鮮なものとして繰り返されることにもなるではないか。ムスリム（イスラム教徒）はその麗しい福音を繰り返し繰り返しあきもせず喜びを以てその都度新鮮な気持ちで朗誦し続けてゆく。アラベスクになっているではないか！

b. このアラベスクという形式或いは現象は（またまたアラビヤ語に選ってくるけれども）アラビヤ語自体にも見出される。例えばラクダをとれば、日本語やインド・ヨーロッパ諸語では、雄のラクダや痩せたラクダ等と呼称するのに、普通、雄ラクダ・雌ラクダ・野性ラクダ・痩せラクダ・でぶラクダ・子ラクダ・赤ちゃんラクダ等々の表現法（これを合成語という）をとるのであろう。つまり或る一つの基準になる語（この場合ラクダ）を中心的な視座に据えて全体をまとめようとする態度であるが、これがアラビヤ語にはないのである。上例のそれぞれにてんでばらばらの単語を当ててすましている。上例はラクダという名詞の場合であったが、動詞でも、例えば歩くの合成語的表現法がない。日本語や印・欧語では、おそ歩きをする（ゆっくり歩く）、はや歩きをする（速く歩く）等々と合成語風や副詞を用いて表現すべきところを、一つ一つばらばらの単語があるのである。勿論日本語や印・欧語にもこれに類したことはあるであろう（現に日本語では例えば出世魚など）。ラクダはアラビヤ人の生活に密着しているので細かな呼称があるのではないかと言いたくなるであろうが、事はラクダだけではなく、歩くだけではない。空に浮かんでいるあの雲でも形の違いによって別々の名前を持っているのである（日本語では御承知の様に翳雲・入道雲等々の合成語）。

c. ここに浮かび上がってくるのはアラビヤ人の持つ個物への凝視の精神である。幾つかの個物が集まって全体が出来ているとしよう。それが全体であるからには、それらの個物からなにがしかの要素を抽象して全体としてのまとまりの相の下で改めて個物を全体の部分として眺めようとするのが日本人や印・欧人であるが、アラビヤ人は個物を抽象して部分とし全体としてのまとまりを付けるということをやりたがらない。個物を個物のままに眺めようとする。彼等とて全体が皆無である訳ではない。ただ、全体としてのまとまりよりも個物のままと望むのだ。全体よりも部分（個物）が重要なのだ。彼等の社会生活もせいぜい25~30の家族から成る氏族としての単位までで、それより大きな部族としての全体性には大戦争のような異常事態がおこらない限りはまとまること
が無かったことも思い出して欲しい。

d. アラビヤ語の小説なども物語り全体としてのまとまりにかけ、内部にちりばめられた個々の部分的な美しいエピソード等に力が入れられる。例えば諸君もご存知のアラビアン・ナイトはつまり千一夜物語で、夜毎に異なった一つづつの物語りが披露される趣向になっている。

e. クルアーンは114編の章から成るが、その配列は内容に無関係で、単に長い順に並べられているのである。配列から見る限り全体としての統一には全く関心が払われていないことが分かる。クルアーンを読唱する時どこから読み始めてもよくどこで終わっても良いのだ。始まりも終わりもないのだから。

15

11/29